

「ファンタジー」を考える

佐々木隆

プロローグ

筆者は第四十二号で「「異世界」を考える」を投  
稿した。日本のライトノベルから大きく発展した  
「異世界もの」は大きな視点から見れば「ファンタ  
ジー」である。今回はファンタジーについて考えて  
みたい。

一 「ファンタジー」の定義

Martin Gray. *A Dictionary of Literary Terms*  
(1984)に以下のように記載されている。

Though, like FANCY, 'fantasy' originally  
applied generally to the mind's perceptual

and imaginative processes, it is now used to  
denote the most playful kind of imagining,  
divorced from any contact with the real world  
of things and ideas. 'Fantasy' literature  
deals with imaginary worlds of fairies, dwarves,  
giants and other nonrealistic phenomena. A  
fantasy world may be an entirely consistent  
parallel with the ordinary world, as in the  
fairy-tale trilogy *Lord of the Rings* (1954-5) by  
J.R.R. Tolkien which makes use of many  
Nordic myths; or it may have a dream-like  
illogicality and episodic structure, kinds of  
fantasy are open to ALLEGORICAL or  
SYMBOL interpretation. (1)

この定義は面白くもなるとは思いますが、  
ファンタジーとは「imaginary world, (想像世界)

と、第二点はファンタジー文学の事例として *Lord of the Rings* (1954-5) by J.R.R. Tolkien を挙げているのだ。

## 二 ファンタジーの源は

多摩豊は神月摩田璃『SF&ファンタジー・ガイド』(1989)の解説で次のように述べている。

「ファンタジー」とは「読み手の想像(創造)力を触発するもの」なのだ。(四)

ファンタジーは現実とかけ離れたところにあるものだ。

But fantasy lives in a different climate from other fiction—in an atmosphere of reality in

unreality, of credibility in incredibility. (三)

John Joseph Adams (1976)は *Cosmic Powers* (2017)の“Introduction”の冒頭で“The foundation of science fiction and fantasy is sense of wonder.”

(四)と述べているが、科学小説(SF)にしるファンタジーにしる、その根源には「センス・オブ・ワンダー」があるという。そもそも科学小説にしるファンタジーにしる大きな流れから言えば、Gothic(恐怖小説)がその根底にある。森下一仁『思考する物語 SFの原理・歴史・主題』(二〇〇〇)でも「センス・オブ・ワンダー」について触れている。(五)

「ワンダー」は驚異、驚きということだが、想像力から生み出された世界に不思議な感じやこれまでにみたこともない世界に魅了される、心の動きということになる。科学小説は不合理な展開や辻褃の

合わない展開は基本的にないが、ファンタジーは設定を自由にできるため、創造の範囲が無限に広がることになる。

三 ファンタジーはいつ頃から注目を浴びるようになったのか

Martin Gray. *A Dictionary of Literary Terms* (1984)では代表的な作品として J.R.R. Tolkien *Lord of the Rings* (1954-5) を挙げているが、この指摘はファンタジー辞典でも指摘されている。これについては井辻朱美<sup>(6)</sup>も同様に指摘している。

英米文学史では Lewis Carroll. *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) Frank Baum. *The Wonderful Wizard of Oz* (1900)がファンタジーの初期のものとして指摘されるが、こどものための読み物の必要性から誕生した経緯もある。従って、

ファンタジーの転回点の作品である。

ファンタジーがひとつのジャンルとして大きく脚光を浴びるようになったのは J.R.R. Tolkien. *The Hobbit, or There and Back Again* (1937)をはじめ、それ以降 *The Lord of the Rings* のシリーズや C.S. Lewis. *The Chronicles of Narnia* (1950-1956)でもある。いずれも映像化は難しいといわれた作品である。このことはファンタジーがあくまで想像の産物であることを物語っている。

ヒュローグ

Chris Baldick. *The Oxford Dictionary of Literary Terms* (2008) ではファンタジーを “imagined worlds,”<sup>(7)</sup> としている。ファンタジーは現実に存在するものを描くのではない。だからこそ、これを視覚化しようとする時、すなわち映

像化しようとする時、並々ならぬ困難がある。

年十一月、二一九頁。

J.R.R. Tolkien. *The Hobbit, or There and Back Again* (1937)をたぐい、それ以降 *The Lord of the Rings* のシリーズと C.S. Lewis. *The Chronicles of Narnia* (1950-1956)が映画化された時、ファンタジーはさらに大きくなりとなった。その後、J.K. Rowling' *Harry Potter* (1997-2007)の登場により、ファンタジーは表舞台に登場することになったのだ。

(二) Lillian H. Smith. *The Unreluctant Years* (American Library Association, 1953), p.152.

(四) John Joseph Adam "Introduction," (John Joseph Adams, editor. *Cosmic Powers* (Saga Press, 2017), p.ix.

(五) 森下一仁『思考する物語 SFの原理・歴史・主題』(東京創元社、二〇〇〇年一月)、三三三〜三四頁。

注

(一) Martin Gray. *A Dictionary of*

*Literary Terms* (Longman York Press,

1984), pp.84-85.

(二) 多摩豊「解説」(神月摩由璃『SF&

ファンタジー・ガイド』社会思想社、一九八九

(六) 井辻朱美「ファンタジー―拡張現実への流れの中で」(白井澄子・笹田裕子編、『英米児童文化 55のキーワード』、ミネルヴァ書房)、二二四〇頁。

(七) Chris Baldick. *The Oxford Dictionary of Literary Terms*

(Oxford University Press,  
2008) , p.136.